

天然ガス/2035 年、需要は 1.5 倍に拡大 —LNG 大国に豪が台頭 米加でも巨大事業続々*

電力・石炭ユニット 担任・理事 森田 浩仁

日本エネルギー経済研究所は 11 月 28 日、国際エネルギー機関（IEA）のマリア・ファン・デル・フーフエン事務局長を招き「国際エネルギーシンポジウム」を開催した。

「World Energy Outlook 2013」によると、2011 年から 2035 年にかけて一次エネルギー需要は 1.33 倍増し、石油、石炭はそれぞれ 1.13 倍、1.17 倍に留まるのに対し、天然ガスは石油換算 27 億 8,700 万トンから同 41 億 1,900 万トンへと 1.48 倍増を遂げる (New Policy Scenario)。

貿易量も 4,000 億 m³/年拡大するが、うち 2,100 億 m³は LNG によるもので (LNG 換算約 1 億 5,000 万トン)、これは 2012 年実績 2 億 3,600 万トンの 64%に相当する。

しかも、既存の LNG 供給者は自国の需要増のため輸出可能量を減じ、新たな供給者との世代交代が必要という。

最近の LNG 市場について少し述べる。

2012 年には LNG 需要は対前年比 2%減少した。対前年比減は LNG 史上初めてである。

欧州・北米では景気低迷や天然ガスの供給過剰を受けて、LNG 輸入量は合計で対前年比 26%も減少した。

欧州では一旦受け入れた LNG を再輸出するという現象も現れ、その量は約 270 万トンにものぼった。

一方、アジア諸国の輸入量は、対前年比 9%増加し、1 億 6,718 万トンを記録した。

2013 年もアジアではシンガポールとマレーシアが LNG 輸入を開始するなど需要は堅調であるが、世界的には 2 年連続の対前年比減が見込まれている。

IEA のいう世代交代の主役として、豪州が台頭してくる。

豪州はすでに我が国向け最大の供給国であるが、LNG 生産・輸出可能量は、現在の年間 2,400 万トンから、2018 年には 8,000 万トンに拡大する。カタールを凌ぎ世界最大の供給国となる。

西豪州沖合のガス田、東部クイーンズランド州炭層メタンに基づく複数の LNG 輸出プロジェクトが建設中である。

*本稿は、2013 年 12 月 11 日付「電気新聞」グローバルアイ欄に掲載されたものを、転載許可を得て掲載。

シェール革命に沸く米国では、LNG 輸出基地建設計画は 22 件もあり、輸出能力は合計 2 億 5,800 万トン/年が積みあがる。これだけで IEA 予測を大きく上回る。

エネルギー省に 34 件もの輸出許可申請が提出され(今年 10 月 15 日現在)、うち 4 件は、米国と自由貿易協定 (FTA) を締結していない国向けの輸出許可を取得している。生産能力は合計 5,650 万トン/年。我が国向け輸出を予定するフリーポート、そしてコーブポイント LNG が含まれる。

シェールガスの技術的回収可能量では米国に次いで第 5 位にランクされるカナダでも (トップ 5 は①中国、②アルゼンチン、③アルジェリア、④米国、⑤カナダ、米国エネルギー省調査) 複数の LNG 輸出計画が進行中であり、キティマット LNG、BC LNG Export、LNG カナダの 3 プロジェクトが輸出許可を得ている。生産能力は合計で 3,200 万トン/年に達する。最大規模の LNG カナダ (25 年間にわたり年間 2,400 万トンの輸出許可を取得) には三菱商事が参画している。

さらに我が国の石油資源開発が参画する Pacific Northwest LNG、BG が進めるプリンス・ルパート、エクソン・モービルの WCC LNG の 3 件が許可を申請中であり、生産能力は合計 8,050 万トン/年と巨大である。

需要予測をはるかに上回る規模のプロジェクト群が一日も早い商業化を模索している。

あとは、需要の伸びに歩調をあわせ、順次、プロジェクトが立ち上がってゆけばよい。

お問い合わせ: report@tky.ieej.or.jp